

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 5 月 19 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20H01187

研究課題名(和文) 前近代イスラーム世界における「組織」の成立に関する比較研究

研究課題名(英文) Comparative Studies on the Formation of Organizations in the Pre-modern Islamic World

研究代表者

柳橋 博之 (Yanagihashi, Hiroyuki)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・準研究員

研究者番号：70220192

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,500,000円

研究成果の概要(和文)：代表及び分担研究者は、それぞれの研究分野に即して、前近代イスラーム世界における様々な組織の態様について考察した。柳橋(代表)は、伝承家に焦点を当て、ハディース(預言者ムハンマドの言行の記録)の伝播及び伝承家のネットワークの拡大を主として計量的手法により分析した。井上はスーフィズム思想がタリーカ(スーフィー教団)の組織化とともにどのように変化したのかを解明した。近藤は、ハワリージュ派の一分派イバード派の宣教活動を進めることを通じて、その組織の在り方について考察を進めた。菊地は、書簡などの資料を用いつつシーア派の分派ドゥルーズ派やヌサイル派の宣教活動を中心として組織の動態の解明を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

イスラームには、キリスト教における教会に対応する組織はなく、また仏教やキリスト教における教団に対応する組織も最初はなかった。しかし、法学や伝承学、あるいは神秘主義が形成・発展する過程で、伝承家のような緩い紐帯で結ばれた集団や、スーフィー教団が成立し、また7世紀に始まる宗派分裂の結果、特に少数派においては比較的堅固な組織が形成されていった。本研究プロジェクトは、伝承学、スーフィズム、そしてヌサイル派やイバード派といった少数宗派の専門家が、それぞれの研究成果を持ち寄ることにより、前近代イスラーム圏における組織の形成の過程および組織の性格の異同を解明することができた。

研究成果の概要(英文)：The members analyzed various organizations in the pre-modern Islamic world in their respective fields. Yanagihashi shed light on the dissemination of hadiths and the development of the network of traditionists based primarily on the quantitative analyses. Inoue clarified the process by which the Sufi thoughts changed as the Sufi sects were organized as tariqas (Sufi orders) were formed and enlarged. Kondo analysed various sources of the Ibadis, one of the Khawarij sects, to trace the missionary activities of the sects. Kikuchi analysed materials including correspondences of the Nusayris, one of the Shiite sects, to consider the organization of this sect.

研究分野：イスラーム学

キーワード：ハディース 伝承家 計量分析 ヌサイル派 イバード派 メヴレヴィー教団 スーフィズム ドゥルーズ派

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究計画に参加した研究者は、イスラームにおける法学、伝承学、神秘主義、少数宗派研究と、それぞれ異なる分野の専門家であるが、いずれもその活動主体、すなわち伝承家やスーフィーなどが、時代の経過とともに組織としての体裁を整えていった過程に関心をいただいていた。そこで、各自の成果を持ち寄ることにより、イスラームにおける組織の形成と発展について新しい総合的な知見が得られるのではないかと考えて本研究計画を思いつくに至った。

2. 研究の目的

本研究計画は、大きく分けて2つの目的を有する。一つは、法学派、伝承家、スーフィー教団、少数宗派などの様々な組織について、その内実がどのようなものだったのかを調べることである。たんに同一の教義を奉ずる人々の集団なのか、それとも比較的閉ざされた師弟関係をその本質とするのか、あるいはもっと強い拘束力を伴う集団なのかという性格付けを行った上でなければ、組織の成立や展開を論ずることはできないであろう。もう一つは、特に法学派やスーフィー教団に該当することであるが、師弟関係を通じた学問の相承の場 原資料中ではしばしば「ハルカ」(原義は「環」と呼ばれる)がどのように組織としての実体を備えた集団へと昇華していくのか、また教義が統一され標準化されていくのかを、考えられうる限りの様々な契機に基づいて説明を試みることである。

3. 研究の方法

参加した研究者はいずれも古典的な文献の分析を行ってきた。本研究計画でもその点は変わらなかったが、部分的には計量分析の手法を用いるなど、近年の研究動向にも留意した。全体の成果は、最終年度の2022年11月に開催された研究成果報告講演会や、森本一夫・井上貴恵・小野純一・澤井真(編)『イスラームの内と外から 鎌田繁先生古稀記念論文集』(2003年3月刊)などに反映されている。

4. 研究成果

(1) 伝承家によるハディースの共有：定性的記述と計量分析の架橋の試み(柳橋)

預言者ムハンマドの言行の記録であるハディースは、イスラームの教義の根拠として、クルアーンに準ずる権威を有する。特に、法学ハディース(ハディースのなかで法学的内容を有するもの)は、確立されたスンナ派の法源論において、第1法源たるクルアーンに次ぐ権威を有する。ハディースを収集し、その真偽判定を行う専門家が伝承家(muḥaddithūn)である。しかし、長いイスラームの歴史を通じて、伝承家の大部分は、伝承学に興味を持つ私人の学者であった。もちろん、伝承家のなかにはマドラサの教授として機関の一員として活動することもあったが、それはいわば官製ウラマーとしてであって、伝承家が伝承家の資格において、国家機関としてであれ民間の集団としてであれ、組織化されるという現象は絶えて見られなかった。

とはいえ、スンナ派の伝承家は、プハーリーやムスリムの『真正集』に代表されるハディース集に収録されたハディースを、少なくとも蓋然的には真正と見ており、ほぼ同じハディース(その数は後で推定する)を共通の知識として持っていた。この限りでは、伝承家は、言葉の非常に広い意味においてではあるが、一つの組織を構成しているということができる。

では、伝承家 その活動の範囲はイスラーム世界全体に及び、ほぼ同じハディースを、ある程度真正である蓋然性が高いと見るようになった時期はいつ頃であろうか。この点については、一次資料からおおまかな年代決定が可能である。しかし本研究では計量的分析により、一次資料から得られる推定を検証することを試みた。その分析方法の詳細は、今年6月に刊行が予定されている下記の単著で詳細に説明されているので、ここでは結論だけをごく簡単に述べるにとどめる。図1は、プハーリーの『真正集』に現れる8740個のハディースを、原本を同じくする2,615のハディース群に分け、それぞれが含む異本の数の分布を再現するような数理モデルを作り、それに従って、伝承家の間で知られていたハディース群の数とそれぞれのハディース群に含まれる異本の平均数の経年変化を示す。この図は、一次資料に見られる定性的な記述を裏付けるものである。

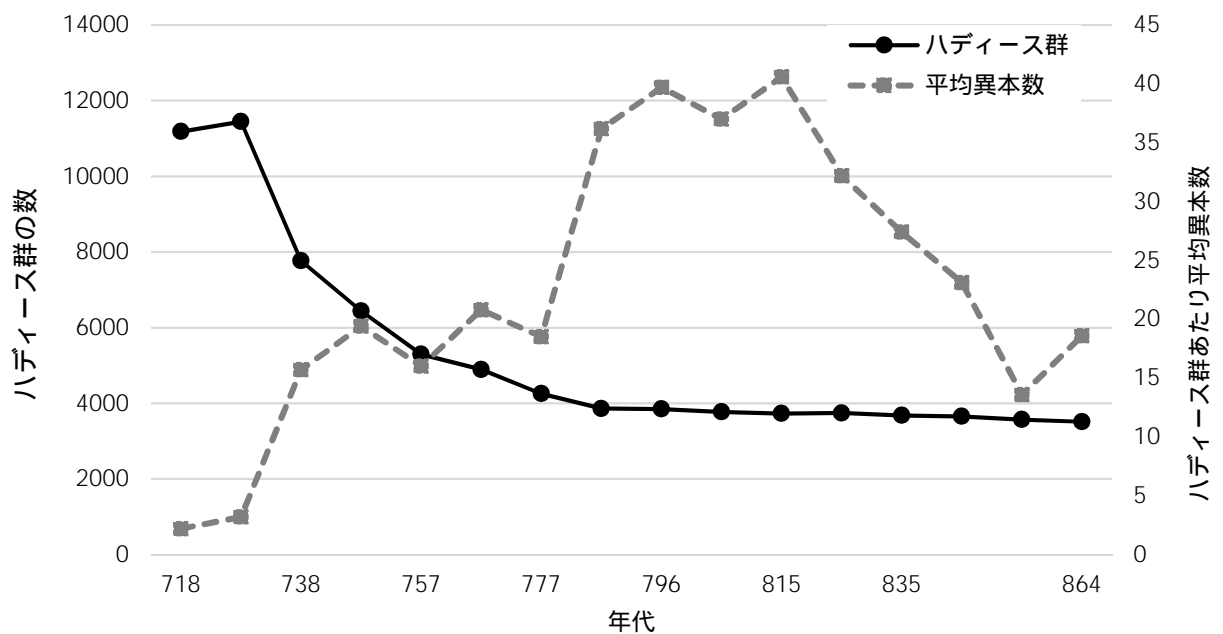


図1 ハディース群と平均異本数の経年変化

この図のなかで、777年から796年にかけて平均異本数が激増している理由はやや難しいが、次のように考えれば説明がつく。すなわち、現存するハディースは、その多くがバスラを筆頭とするハディース学の中心地の伝承家によって収集され、ブハーリーに伝えられたものである。ここで、ハディースなどの主として宗教上の知識を求めて諸国を遍歴する「知識探訪の旅」が、マアマル・イブン・ラーシド（770年没）やイブン・アル＝ムバーラク（797年没）を嚆矢とすることを考慮に入れると、777年から796年にかけては、バスラ以外の地域で流布していたハディース群が初めてバスラ等に組織的に導入されたと見ることができる。異本数自体が突然増えることは考えにくいので、この激増は、ハディース収集の方法の変化に帰せられるのであろう。

ハディースの計量分析はまだ端緒についたばかりではあるが、従来のもっぱら定性的記述に依拠する方法論に比べて大きな可能性を秘めていると見ることができる。なお、本研究成果の詳細については、Yanagihashi, Hiroyuki, *Reconstructing the Variant Generation Process of Hadith*, Sheffield: Equinox, 2023を参照されたい。

(2) スーフィー思想とスーフィズム教団（井上貴恵）

井上はスーフィズム思想という観点からスーフィーの組織であるスーフィー教団と思想について研究を行った。本研究で目指したのは、教団の始祖とされたスーフィー聖者、教団の運営者、教団という3者の連関を思想面から検討し、教団の発展史とスーフィズム思想との統合の様子を検討することであった。具体的に研究の対象としたのは、教団化の加速する時期に勃興した、イラン南部シーラーズを拠点とし、ルーズビハーン・バクリー（1209年没）とルーズビハーン教団、そしてイブン・アラビー（1240年没）とほぼ同時期に活躍したルーミー（1273年没）の思想を基盤として創設されたメヴレヴィー教団についてであった。

2つの教団を比較検討してみると、以下のことが明らかとなった。

ルーズビハーン教団は始祖であるルーズビハーン・バクリーの死後、そのひ孫らによって創設された教団である。ルーズビハーンのひ孫らが生きた当時、著名なスーフィーの思想とその霊廟を中心とし、弟子らによって1つのスーフィー教団という組織が構成されるという過程がしばしば見られた。当時の教団が通常備えていた物理的な要素は1)教団の系譜、2)著名な始祖(聖者) 3)始祖の墓、であり、教団の思想を支えるのは始祖の思想と始祖にまつわる逸話(聖者伝)であった。

ひ孫らが著した始祖に関する逸話は、聖者伝としてまとめ上げられ、教団員の獲得に大いに役立ったと思われる。実際、ルーズビハーン教団はルーズビハーンのひ孫の4世代先まで資料からその存在を確認することができる。しかしながら、以降の足取りは途絶えており、ルーズビハーン教団はひ孫から4世代前後の時期に滅亡したと考えられている。ひ孫らの遺した聖者伝を見る限り、ルーズビハーン教団の勧誘方法は始祖であるルーズビハーンの「奇跡譚」に頼ったものであることが分かる。

一方メヴレヴィー教団は、ルーミーの実子であるスルタン・ワラド（1312年没）によって発足した。上記の物理的な教団の要素はすべて備え、始祖であるルーミーの思想を教義の基盤とする教団である。スルタン・ワラドは多くの著作を残したが、その特徴は、「父であり、教団の思想的基盤であるルーミーの思想を弟子らに伝承する」ことへの専心にある。彼の著作の多くはル

ルーミーの思想を「解釈する」という形で著されているからである。

しかしながら、スルタン・ワラドの著作を精読すると、単に彼が父であるルーミーの思想を踏襲し、伝えるという役割に徹しているわけではないことが分かった。例えば、ルーミーの思想には欠けていた、弟子の「教導」の精神を説き、そして父の複雑な善悪観を調整し、「勧善懲悪」的な世界観を良しとした。つまり、スルタン・ワラドは、教団経営という点からみて明らかに利があるように父の理論を修正しているのである。以上の点からは、師中心型の共同体への強い意欲が感じられる。メヴレヴィー教団は現代まで残存した教団である。歴史的、地域的な背景が異なるため、ルーズビハーン教団と単純な比較を行うことは避けるべきではあるが、メヴレヴィー教団の教導の姿勢、そして現世において善く生きるための方策を提示するという姿勢が、教団員の継続的な確保につながった可能性はある。そのように考えるのであれば、いわゆる「民衆的イスラーム」と分類されるスーフィー教団が提供し、また教団にかかわる民衆が求めてきたものは、従来言われていたような現世利益的な世俗的側面だけでなく、「より善い信仰の在り方」とでもいえるべき、イスラームの聖なる側面なのではないだろうか。

本研究について詳しくは、Inoue “The View on Virtue and Vice by Sultān Walad: A Comprehension of Iblīs,” *Journal of the Institute for Sufi Studies* vol. 1-1, pp. 15-26, 2022 を参照されたい。

(3) イバード派の組織：組織の運営と運営者の再生産（近藤洋平）

本研究課題においては、イスラームの少数派イバード派について、(A)組織の運営という観点からみた学者と一般信徒の関係に関する諸規定の考察、(B)組織の運営者の再生産という観点からみた教育の場と内容の考察、の2点について分担した。イバード派は主としてアラビア半島と北アフリカに活動拠点を有していた。上記(B)については、当初北アフリカのイバード派の動向に焦点を当てる予定であったが、(A)(B)ともに西暦10世紀から12世紀のアラビア半島で活動したイバード派の著作に目を向けた。

研究期間を通じて、以下のことを明らかにした。組織の運営という観点からみた学者と一般信徒の関係について、イバード派においては、他宗派と同じく、学者たちが一般信徒に日々の指針を与える存在に位置づけられた。そして学者と一般信徒という区別は、日々のやり取りを通じて強化されたと考えることができる。例えば一般信徒は学者たちに日常生活や儀礼行為についての質問を投げかけるが、そのさい双方に求められるエチケットや接し方が法学書で詳細に論じられている。その内容は、学者と一般信徒という立場の固定化に影響を及ぼしたと考えることができる。

他方、組織の運営者の再生産という観点からみた教育の場の考察として、本研究では師と弟子とのやりとりを記録したイブン・バラカ（西暦10世紀半ばごろ没）の『講義録』の内容を分析した。師と弟子のやりとりの内容は法学的問題、神学的問題を含む多岐にわたり、やりとりの場において師は自らの見解だけでなく、先代から記憶により保持した見解を弟子に伝えた。一方弟子は、単に一人の師に問いその回答を書き留めるだけでなく、別の師に同じ問いを投げかけたり、師に対して反論を試みたりしている。また注目すべき点として、弟子が書き留めた内容を、師が確認する、という方法がとられていたことが挙げられる。こうした方法により、次世代に伝えなければならない知識が選別され、共同体を支える存在として学者が養成された。すなわち、イバード派においても、教育の場が組織の運営者の再生産の場として機能していたことがわかる。

詳しくは、Yohei KONDO(2021) “Transmission of Knowledge among the Ibadīs in Oman: Ibn Baraka’s Notebook (taqīd) and Its Circulation,” *Nouvelles chroniques du manuscrit au Yémen*, Numéro spécial 3, pp. 38-59 を参照されたい。

(4) シーア派の宣教活動と共同体内部の統治（菊地達也）

本研究課題の研究計画にあるように、菊地はシーア派の宣教活動と共同体内部の統治を研究主題とし、シーア派系諸派組織の指導者が外部と内部に向けて著した著作を典拠として、彼らの組織的活動の実像と特徴を明らかにすることを目指した。

上記の目的のために菊地がまず着目したのは、11世紀におけるドゥルーズ派の組織的宣教活動である。ドゥルーズ派は11世紀初頭にシーア派の一派、イスマーイール派から分派した宗派であり、特定の人物の神格化、輪廻思想といった特徴的な教義を保持する。ドゥルーズ派の創始者ハムザ・イブン・アリー（1021年以降にも没）は、イスマーイール派が支配する巨大王朝、ファティマ朝の乗っ取りを目指したが、その試みはほどなくして失敗した。本研究課題において菊地が注目したのは、ハムザの後継者ムクタナー（1043年以降に没）が状況の打開を目指して東ローマ帝国皇帝といった異教徒やインド、イエメンといった周縁領域のイスラム教徒に宛てて書いた宣教目的の書簡である。その上で、この種の書簡においては彼ら独自の教義が必ずしも明示されずに自派への賛同が呼びかけられていること、特に後者のタイプの書簡において自派組織維持と敵対勢力の悪魔化が読み取れることを解明し、その研究成果を「イスラーム教における組織的宣教：初期ドゥルーズ派の場合」(科研費基盤B「前近代イスラーム世界における「組織」の成立に関する比較研究」成果報告公開講演会、2022年11月19日、福岡女子大学)において発表した。

また、菊地はヌサイル派(アラウィー派)の組織形成についても注目した。同派の起源はしば

しば 8 世紀に溯って説明されるが、2000 年代になってはじめてその存在が公になった著作の分析を通じて、10 世紀に活動したハスィービー（957 年または 969 年に没）の組織と教義が同派の事実上の形成を意味していたことを明らかにした。その詳細については「ヌサイル派源流思想研究のための予備的考察：ハスィービー著『ラストバーシュ書簡』の分析を通じて」森本一夫・井上貴恵・小野純一・澤井真（編）『イスラームの内と外から 鎌田繁先生古稀記念論文集』ナカニシヤ出版、2023 年、346-366 頁を参照されたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Kie INOUE	4. 巻 1
2. 論文標題 The View on Virtue and Vice by Sultan Walad: A Comprehension of Iblis	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of the Institute for Sufi Studies	6. 最初と最後の頁 15-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32739/ustad.2022.1.5	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kie INOUE	4. 巻 58
2. 論文標題 The Islamic Notion of Conviviality: Ali Shariati 's Argument about Women 's Rights	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Orient	6. 最初と最後の頁 51-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菊地達也	4. 巻 61
2. 論文標題 イスラム思想における極端派的伝統：ヌサイル派（アラウィー派）源流思想における輪廻思想を事例として	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東洋学研究	6. 最初と最後の頁 325-345
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柳橋博之	4. 巻 96
2. 論文標題 ムフリムの婚姻と終身贈与をめぐる学説とハディースの対応関係について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 イスラム世界	6. 最初と最後の頁 1-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 KONDO Yohei	4. 巻 3
2. 論文標題 Transmission of Knowledge among the Ibadis in Oman: Ibn Baraka 's Notebook (taqyid) and Its Circulation	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Nouvelles chroniques du manuscrit au Yemen	6. 最初と最後の頁 38-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 井上貴恵	4. 巻 3
2. 論文標題 スルタン・ヴァラド著『マア-リフ』第3章翻訳	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 イスラム思想研究	6. 最初と最後の頁 123-139
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15083/0002000997	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柳橋博之	4. 巻 90
2. 論文標題 ハディースの計量的分析の試み-ブハーリー『サヒーフ』を資料として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 西南アジア研究	6. 最初と最後の頁 77 93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菊地達也	4. 巻 87-6
2. 論文標題 イスラム教の説く死後の世界	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大法輪	6. 最初と最後の頁 85 89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菊地達也	4. 巻 87-6
2. 論文標題 イスラム教の「神」観	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大法輪	6. 最初と最後の頁 99 103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菊地達也	4. 巻 87-6
2. 論文標題 イスラム教の靈魂観	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大法輪	6. 最初と最後の頁 121-125
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井上貴恵	4. 巻 2
2. 論文標題 スルタン・ヴァラド著『マア-リフ』序文、第1章及び第2章翻訳	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 イスラム思想研究	6. 最初と最後の頁 71 89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 井上貴恵
2. 発表標題 近代日本におけるイスラーム神秘主義へのまなざし 井筒俊彦を中心に
3. 学会等名 明治大学文学部哲学専攻学術シンポジウム「科学と神秘」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 井上貴恵
2. 発表標題 井筒俊彦と酔語
3. 学会等名 国際シンポジウム公開講演 井筒俊彦の東洋哲学を再定置する
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yohei KONDO
2. 発表標題 Introspection of Religious Identity across the Indian Ocean: Reading Ali b. Muhammad b. Ali al-Mundhiri's Works
3. 学会等名 The 1st International Symposium of the Indian Ocean World Studies "Discovering the Indian Ocean World: "Gyres", Indian Ocean and beyond"
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 近藤洋平
2. 発表標題 イバード派における「講義録」の作成と利用
3. 学会等名 成果報告公開講演会「前近代イスラーム世界における「組織」」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yohei KONDO
2. 発表標題 Establishing Common Grounds: Ibadi Theories of Abrogation
3. 学会等名 東京大学中東地域研究センター主催研究会 第4回「改宗／布教と生存戦略」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 近藤洋平
2. 発表標題 オマーンの信仰と宗教実践
3. 学会等名 「深掘り！ オマーン・スルタン国」駒場中東セミナー第6回
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 近藤洋平
2. 発表標題 現代オマーンにおける文化遺産政策の展開
3. 学会等名 オマーン南部海港都市の脆弱な社会環境下にあるリビングヘリテージの復興と継承（サララ科研）建築班研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 菊地達也
2. 発表標題 イスラム教における組織的宣教：初期ドゥルーズ派の場合
3. 学会等名 成果報告公開講演会「前近代イスラム世界における「組織」」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 井上貴恵
2. 発表標題 メヴレヴィー教団の形成とルーミー思想
3. 学会等名 成果報告公開講演会「前近代イスラム世界における「組織」」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 柳橋博之
2. 発表標題 ハディースの集積と伝播から見た伝承家という集団
3. 学会等名 成果報告公開講演会「前近代イスラーム世界における「組織」」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yohei KONDO
2. 発表標題 The Conception of istiqaama (righteousness) in the Eastern Ibadi Thought
3. 学会等名 11th Conference on Ibadi Studies (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 菊地達也
2. 発表標題 イスラーム思想の中のギリシア哲学
3. 学会等名 連続シンポジウム「世界哲学・世界哲学史を再考する」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 菊地達也
2. 発表標題 イスラーム教分派学と異端 / 異教
3. 学会等名 西洋中世学会第13回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 菊地達也
2. 発表標題 イスラム思想における極端派的伝統：ヌサイル派（アラウィー派）の源流思想に関する研究序説
3. 学会等名 東洋哲学研究所イスラーム・レクチャー
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 YANAGIHASHI Hiroyuki	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Equinox	5. 総ページ数 302
3. 書名 Reconstructing the Variant Generation Process of Hadith: Based on the Quantitative and the Isnad-cum-matn Analysis	

1. 著者名 井上貴恵ほか編	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 680
3. 書名 イスラームの内と外から 鎌田繁先生古稀記念論文集	

1. 著者名 近藤洋平	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 22
3. 書名 「イバード派の内と外 救済資格に関する議論について」井上貴恵ほか（編）『イスラームの内と外から 鎌田繁先生古稀記念論文集』	

1. 著者名 菊地達也	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 21
3. 書名 「ヌサイル派源流思想研究のための予備的考察：ハスィービー著『ラストパーシュ書簡』の分析を通じて」井上貴恵ほか編『イスラームの内と外から 鎌田繁先生古稀記念論文集』	

1. 著者名 柳橋博之	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 15
3. 書名 「解放選択権をめぐるハディースと法学説の展開についての一考察」井上貴恵ほか（編）『イスラームの内と外から 鎌田繁先生古稀記念論文集』	

1. 著者名 Yohei KONDO	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所	5. 総ページ数 204
3. 書名 Survival Strategies of Minorities in the Middle East	

1. 著者名 近藤洋平	4. 発行年 2021年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 386
3. 書名 正直の徒のイスラーム	

1. 著者名 伊藤邦武、菊地達也	4. 発行年 2020年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 288
3. 書名 世界哲学史 3	

1. 著者名 鈴木董、菊地達也	4. 発行年 2020年
2. 出版社 清水書院	5. 総ページ数 372
3. 書名 侠の歴史 西洋編+中東編	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	近藤 洋平 (Kondo Yohei) (20634140)	福岡女子大学・国際文理学部・准教授 (27103)	
研究分担者	菊地 達也 (Kikuchi Tatsuya) (40383385)	東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授 (12601)	
研究分担者	井上 貴恵 (Inoue Kie) (70845255)	明治大学・文学部・専任講師 (32682)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------